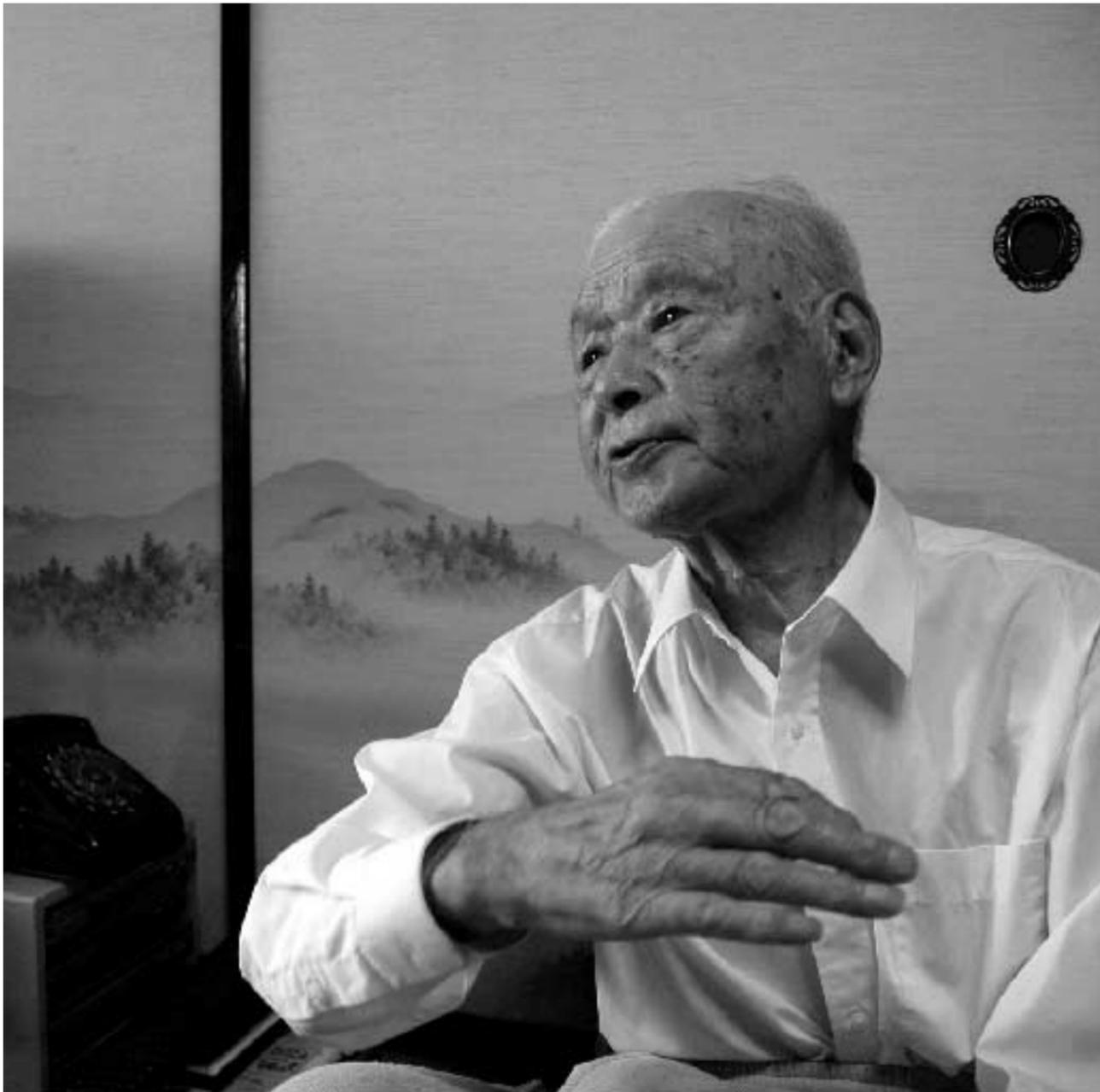


今、昔を思う

小林 達郎さん（102歳・豊科重柳）

←かくしゃくとした口調で話す小林さん。元研成義塾の生徒らしい気骨が漂う。



市内最高齢の男性、小林達郎さん。小林さんは若いころ、キリスト教精神に基づいた私塾「研成義塾」で、井口喜源治から直接学び、現在でも国政や世界の動きに敏感で見識も広い。また、耳は遠くなったが、眼鏡などをかけずに新聞を読み、外出時には愛用の自転車を出掛ける。

小林さんが歩んできたこれまでと、102歳になって考える人生観について聞いた。

研成義塾での思い出はありますか？

井口先生は、今でこそ「偉人」として知られますが、当時は「変わり者」と言われていました。それは人が言えないことを言っていたからだと思います。先生は常に「正しいことをしなさい。曲がったことはしてはいけない」と言っていました。井口先生の教育は自分の将来のためになったと感謝しています。

井口先生は、衛生展覧会に生徒を連れていって、「これを見ろ。タバコで肺は真っ黒だ。健康のために良くない」と言っていました。私もその教えを守り、タバコは吸いません。子ども、孫も一切やりません。また、酒も一滴も飲みません。井口先生の教育では、「少しくらいならいいじゃないかと世間は言う。けれど酔ってくれば、『俺の杯が受けられないのか』となってしまう。全く飲まなければ、『あいつは飲めないから』と通せるようになる」と言っていました。

井口喜源治先生は今では「偉人」ですが、当時は「変わり者」と言われていました。

「人間は正しく生きなければならぬ」。

先生のその言葉が、今も頭を離れません。

ました。その言葉が今でも頭を離れないでいます。

一番仲の良かった同年生が、矢村（穂高有明）にいたが、4年前くらいに亡くなりました。実際に教わった生徒は、もうわずかだと思えます。

—90歳を過ぎてても働いていたそうですが、

幼いころ、踏み台を使って、農耕馬にくらべて着せた記憶があります。それくらい小さいころから働き詰めでした。私は兄弟が3人いて、「何



←国政に造詣が深く、現在でも政治・経済の雑誌を愛読している。

でおればっかり働かせる。不公平じゃないかと父親に言ったこともあり。百姓というのは、収入が少なく、骨の折れる仕事だと小さいながらに思いました。

45歳くらいで父親に身上を渡され、自分が思うことができるようになり、わさび漬の製造販売をするようになりました。青森や仙台へも売りに行きました。その後、65歳を過ぎて、わさびの栽培や手入れをするなど、93歳まで働きました。働けるうちに働いた方が良く思っていました。今思えば、ずっと働いてきたことが、自分にとっては良かったのだと思えます。

—ご家族を大切にされ、愛妻家であったと聞きます。

女房は4年ほど前に亡くなってしま

ましたが、家族のため、本当に良くやってくれました。私の家庭は本当に円満でした。円満な家庭を作るには、いい相手を見つけないければだめだと思います。そういう意味でも、私は本当に幸せでした。

女房とはけんかというものをしたことがありませんでした。お互いに無理なことを言わなかったことが、円満の秘訣かもしれません。

昔に比べ、経済が良くなったことは幸せだと思っています。世界では経済を理由に不幸な事件がたくさん起きています。まずは経済が良くなるのが大切だと思います。

それから、やはり人間は、家庭が円満であることが大切だと思います。

—人生の後輩たちにメッセージを。

政治に無関心な人が多いと思います。政治は直接生活に影響を与えるものです。誰でもいいというのではなくて、良い人を選ばなくてはならない。それには、この人はこういう考えを持っているということを常に見ていないといけないと思います。もっと国民は、政治経済の勉強をし、関心を持つべきだと思います。